

第4回大会報告

一般講演42題に及ぶ熱心な討議

「日本老年歯科医学会」の発足を決定

日本老年歯科医学研究会では、平成元年度の総会および学術研究大会を9月9日、10日の両日に東京・お茶の水の日仏会館ホールにおいて開催した。この第4回大会は、日本歯科大学の園山 昇教授が大会長を勤められ、準備委員長には稲葉 繁助教授がその労をとられた。

42題に及ぶ一般講演に熱心な討議が加えられ、さらに特筆すべきことは、平成2年4月より本研究会が「日本老年歯科医学会」と名称を変更し、内外の充実を計るべく決定がなされたことである。

大会は、各分野から42題の一般講演に加えて、基調講演、シンポジウム、特別講演各1題づつが行なわれた。大学や老人病院に関係する歯科医師、医師、歯科衛生士、保健所職員等幅広い層が出席し、本大会期間を通じて、予定時間を超過する程活発な討議が行なわれた。

今回は、5月中に演題募集を行ない、8月にプログラムが完成するのと同時に全会員へ送付した。十分な広報活動も行なうこともできなかったのだが、総会当日には400余名の参加者と28社の賛助会員の参加があり、あらためて老人医療に対する関心の高さを実感した。

講演会は9月9日の午前より一般講演が開始され、ほぼ予定通りに進行した。さらに大会初日夕刻より、場所を飯田橋の摩天楼大飯店に変えて懇親会が開催され、短い時間ながら参加された会員が親睦を深めた。

今回の大会では、前回のシンポジウム「在宅寝たきり

老人の歯科医療の現状とその問題点」において討論時間付則のため結論が出なかったため、今回、新庄文明先生に基調講演「在宅寝たきり老人対策の現状と展望」として昨年のシンポジウムの報告をうけて、特に在宅寝たきり老人の現状とそれを取り巻く家族等の生活環境等多くのスライドにて約1時間にわたって熱のこもった口調で講演していただいた。しかし、在宅寝たきり老人の歯科医療は、老人と家族と歯科医師が一体となって協力しながら取り組んでいかなければならず、あらためてその難しさを認識したような気がする。

また、厚生省において提唱されている80才で20本の歯を残そうという運動にも見られるように、老人の口腔衛生に関連した一般講演が多かったようだ。しかし、健康な人はまだいいとしても、特に身体に障害を持っている人に対する口腔衛生指導の難しさ、病院に入院している



シンポジウム



シンポジストの先生方

患者さんに対しては、看護婦や付添い人の人達の協力が絶対に必要であり、その人達に対する口腔衛生に関する教育等まだまだ多くの問題が山積みされているように思われる。

このことに関連して「実年からの歯周病とその管理」との演題で、老人になる以前から歯周疾患を予防していくにはどうしたらよいかという内容のシンポジウムが鴨井久一先生の司会で、下野正基先生、今村嘉男先生により発表が行なわれた。

また、特別講演として「老年者の感染症と投薬」との演題で、稲松孝思先生に講演していただいた。

シンポジストの先生方、特別講演、基調講演をしていただいた先生方には、準備期間が短かったにもかかわらず、熱のこもった講演をしていただいたことに対してこの誌面をお借りして心から感謝申し上げる次第である。

一方、講演会の合間を縫って、理事会、評議員会および総会も予定通り開催された。

9月8日に開催された理事会の提案は、翌日の評議員

会、ならびに総会にて承認を受け、正式に議決された。したがって、渡辺郁馬理事長の再選を含む新規執行部の人選をはじめ、昭和63年度の決算および平成元年度の予算案そして平成2年度において研究会から学会へ移行が滞りなく承認されたことになる。

なお、平成2年の学会として初めての総会ならびに講演会は、平成2年9月29日、30日の両日に大阪歯科大学稗田豊治学長を大会長、上田裕教授を準備委員長として大阪歯科大学にて開催されることが決定している。

末筆ながら、今回の研究会開催にあたっていろいろと不行き届きがあり、会員の皆様にご迷惑をかけたことを深くお詫び申し上げますと共に、ご協力いただいた関係各位の諸氏に深く感謝致します。また、この研究会が学会へと移行することによってさらに大きく飛躍することを心から期待して、第4回老年歯科医学研究会ならびに講演会の総括とさせていただきたい。

園山 昇、稲葉 繁



会 場 風 景